OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中学校教師のライフヒストリーと教師文化の変容 : 1970-80年代の「荒れ」における教師の権威獲得プロセスを中心に
Author(s)	川村, 光
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57701
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【31】

氏名	川村（かわむら）　光（あきら）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　２３５２１　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	中学校教師のライフヒストリーと教師文化の変容－1970-80年代の「荒れ」における教師の権威獲得プロセスを中心に－
論文審査委員	（主査） 准教授　中村　高康 （副査） 教　授　近藤　博之　　教　授　小野田正利

論文内容の要旨

本研究では，権威性という教師文化に揺らぎが生じた教育史上の転機である70－80年代の「荒れ」に注目し，その現象に教師として遭遇した中学校教師のライフヒストリーを，教師の権威という観点から検討すること通して，権威性の変容・維持について考察した。

序章では，権威性が教師の行動様式の中核になっているために教師文化として位置づけられることを指摘した上で，教師文化の定義とその研究領域での残された課題，さらにはその研究において中心的なテーマとなりうる権威性の概念の考察を行った。

まず，教師文化を，教師が有する「形成・維持的要素」と彼らが具体的に作り出す「客体的要素」，その背後にある「価値的要素」，前述した三つの要素を形成する「精神的要素」の四要素から構成されており，多様性，重層性，変容性といった性質を持っているものとして定義した。

前述のように定義した教師文化に関する既存の研究ついては，その文化の特徴を捉えた研究と，社会変化や教育改革による教師文化の変容に関する研究に整理できる。しかし，「荒れ」や学校規範の緩みなど学校内部の出来事と教師文化との関連についてはほとんど解明されておらず，教師文化の中で核となる権威性が「荒れ」によってどのような影響を受けたのかは検討されていない。本研究はまさにその点を考察した研究なのである。

1章では，2章から4章で中学校教師のライフヒストリーを構成するにあたり，本研究のキー概念である教師の権威，「ライフヒストリー」の概念・系譜・方法を考察し，さらに，本研究の対象者について説明を行った。

まず，権威性を考察していくにあたって，ウェーバーの支配の三類型を参考にし，教師の権威を，公権力によって保障された正当性による権威である「制度的権威」，学問的真理・専門的知識とそれらに対する社会的承認によって支持された権威である「学問的権威」，人間的魅力にもとづいた権威である「人格的権威」に分類した。

次に，ライフヒストリーには，研究方法，資料，作品の三種類があり，本研究ではライフストーリー・インタビューを主要な手段とする研究方法としての「ライフヒストリー法」を用いて，権威性という教師文化を考察するにあたっての資料としての「ライフヒストリー」を構成していくことを述べた。

その後，社会学の領域と，教育社会学における教師のライフヒストリー研究の領域でのライフヒストリーの概念の系譜を確認した上で，教師のライフヒストリー研究を，教職のキャリア研究，教職アイデンティティに関する研究，社会的文脈と教師との関係性に関する研究に分類し，先行研究の整理をした。それらのうち，本研究は，一種の社会的マイノリティとしての教師の教職アイデンティティを扱った研究，また，「荒れ」という教育史上の一つの転換点と，教師文化との関連に焦点をあてた研究として位置づけられる。

続いて，研究方法としてライフヒストリー法を用いる理由について述べた。その手法が文化を捉える有効な方法であること，時間的パースペクティブにもとづいて教師の主観的現実の変化を捉えられること，教師の声を拾い上げられることから，本研究の調査手法として用いた。さらに，本研究ではライフコースの視点を取り入れ，教師のライフヒストリーに共通するパターンを探り，教師文化の変容と維持を捉えていくことも指摘した。

次に，本研究のサンプルの選定基準を定め，さらに次章以降に記載する教師の「荒れ」の経験についての語りの特徴を整理するために，ライフヒストリーの構成要素として，「個人時間」「社会時間」「歴史時間」「タイミング」「現在性」があることを明らかにした。その上で，それらの構成要素を基準にして，70-80年代に教職についた18名の男性中学校教師を選定した。

2章から4章では構築することを目指した権威別に，教師のライフヒストリーを構成した。

まず，2章で取り上げた教師たちは，入職当初，「制度的権威」を重点的に構築することを目指していたのだが，それでは「荒れ」が収束せず，さらには自らの教職アイデンティティが揺さぶられた。そのため，構築する権威を「人格的権威」に変化させ，荒れている生徒と関わっていった。そのことから，「制度的権威」重視の教師文化が「荒れ」の影響を受けて，「人格的権威」重視の文化に変容していくことを捉えた。

続く3章では，入職時から「人格的権威」を最重要視し，その権威の構築に一貫して取り組んだ教師たちを取り上げた。彼らのライフヒストリーを通して，教師にとって，「制度

的権威」や「学問的権威」よりも「人格的権威」を構築することが優先され，教師文化の中に「人格的権威」重視という文化があることが窺えた。

4章で取り上げた教師たちは，「学問的権威」を中心にした権威をもとに，荒れている生徒に対して関わっていった者たちである。教科の専門性を軸にした彼らの取り組みは，彼ら個人ないし少数の教師によって共有されるに留まり，教師集団には波及しなかったことが，彼らの語りから窺えた。「学問的権威」重視が教師たちに伝播しにくいことを通して，その権威よりも「人格的権威」に価値が置かれる教師文化の存在が逆照射された。

5章では，2章から4章で構成した教師たちのライフヒストリーについての発展的考察を行った。そこでは，第一に，教師たちの中でこれまで主要な位置を占めていた「制度的権威」が，「荒れ」を契機に周辺的な位置に変化したこと，第二に，すべての教師が「人格的権威」を保持するに至っていること，第三に，多くの教師は一つの権威ではなく，複数の権威を持つことを志向しつつ「荒れ」に対応していること，第四に，道徳性や精神的な深さといった教師自身の人徳に関わった「人格的権威」ではなく，熱意や共感的理解といった，生徒との関係性に関わった「人格的権威」を構築することに，教師たちは力点を置き，「人格的権威」重視の教師文化を支え合って形成している構図があることを指摘した。

最終章では，これまでのまとめを記述した上で，5章で指摘した本研究の知見と1990年代以降の教育政策との関連について考察を行った。そこでは，生徒個人に焦点をあて，共感的理解を伴いながら指導を行うことを主眼においた1990年代以降の教育政策と，関係性に関する「人格的権威」を重視する教師文化とは親和性があったと考えられ，「荒れ」が現行の教育政策を受け入れる土壌を，中学校の教師文化の中に形成させたことを指摘した。その後，今後の課題と展望について述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、戦後教育史において学校のあり方に再考をうながす転機となったと想定される70年代から80年代の「荒れ」現象に着目し、この「荒れ」という現象に実際に現場で遭遇した中学校教師のライフヒストリーを構成し、これを教師の権威という観点から分析することを通じて、教師文化の重要な要素である権威性の時代的変容をとらえようと試みた研究である。

本研究の内容は、おおむね３つの部分から成る。問題設定と方法を論じた序章・１章、具体的な教師のライフヒストリーを構成し分析した２章・３章・４章、および総合的考察および結論と課題を述べた５章・６章である。前半の箇所では、筆者は従来の教師文化研究が学校内部の出来事との関連を十分に扱って来なかったことを指摘し、現代における教師文化には70年代から80年代にかけての「荒れ」現象が関わってきたのではないかとの仮説のもとで、そうした変化をライフヒストリー法によって取り出すことが適当であるとする。また、その際には教師文化の一翼を担う「権威性」に注目する必要があるとし、この権威性をMax Weberの支配の類型論に依拠しつつ「制度的権威」「学問的権威」「人格的権威」に分類し、これらを理念型として提示した。この枠組みに基づいて、１８人の教師のライフヒストリーを構成し、分析したのが中盤の箇所である。多数のライフヒストリーから抽出されたのは、この時代の教師たちは当初は制度的権威を中心とするさまざまな権威を構築しようとしているが、「荒れ」以降は人格的権威を構築しようとするパターンが主流となっていくこと、および人格的権威の中でも、教師個人の道徳性を高める形の権威構築ではなく、生徒との関係性を重視する形の人格的権威（「関係性に関する人格的権威」）と呼ぶべきものを構築する方向性をもっているという結果である。最終章では、こうした知見をもとに1990年代以降の個性重視的・心理主義的な教育政策と現代の教師文化の親和性を指摘し、教師文化が教育改革を支えた可能性を示唆している。

教師文化が「荒れ」の時代をくぐり抜けることで人格的権威、それも関係性に関する人格的権威に収斂する傾向性を持つに至ったとの知見は、従来の教師文化研究のみならず教育社会学的研究においても新鮮な知見であり、本論文のオリジナリティの高さを示すものといえる。また、この知見は１８人ものライフヒストリーを構成することによって導かれたものであるが、教師のライフヒストリー研究においてこれだけの数のライフヒストリーを一度に検討した先行研究はなく、本研究が持つ方法論的意義も非常に大きいということができる。また、筆者は類似テーマの多数の研究業績がありながらもそれらを無理に合体させようとはせず、核となる研究成果のみにしぼってそれを発展させる形で論文を構成しており、その結果、全体として一貫したストーリー性を保つことに成功している。

以上の点から、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと判定した。